

保健体育10年経験者研修の課題について

— 教科に関する質問から —

森 勇 示 (愛知教育大学 保健体育講座)

(2007年10月31日受理)

Training for 10-years Experienced Teacher

— Question of Subject on Physical Education —

Yuji MORI (Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education)

要約 平成17年度から平成19年度に愛知教育大学で実施した保健体育10年経験者教員研修に際して、各受講者が提出した「教科に関する質問」を集約。これを「技術的」「科学的」「哲学的」に分類し、そこから10年経験者研修の課題を検討した。

Keywords : 10年経験者研修 教科の質問

1. 問題と目的

教員研修が都道府県など各採用母体で実施されている。これは教職経験年数に応じた悉皆研修として段階的に行われており、概ね1, 5, 10年目の3段階に区分されている。このうち「10年経験者研修」を大学との連携で行うことを推奨する行政指導(2002, 文部科学省)にともない、それまで行政サイドが中心に企画していた研修プログラムに大学も参画できることとなった。ただし、大学との連携は新構想教育大学(兵庫・上越・鳴門教育大学)への修士課程への派遣研修事業が1982年から始まっており現在でも続いている。そこでは研修内容や効果において大学側の配慮や工夫が不十分である傾向が否めないとの課題もある(西, 1994)。研修内容に関して大学と連携するには次の2点が問題点として考えられる。①大学のもつ専門性が行政サイドの期待する教職の専門性と一致するとは限らない。②大学サイドが10年経験教員の力量を把握せず、適切なプログラムを考案できるとは限らない(森, 2004)。このことは教員養成に対する大学教育への期待として次のような要請があることも関連する。免許取得に関して教職への理解を一層促すようなカリキュラム導入への要請がある。それは例えば、総合演習、教職実践演習などの授業の必修化である。また、採用前の教師教育を手がけてきた大学教育に採用後も含めたプログラム開発要請の期待がある。例えば、教員研修の大学での実施はもとより、教員の免許更新制の導入である。

これまで大学における教師教育はどちらかというところと教育学など教員の総体的専門性を包含する学問領域と教科の学問領域の指導を中核としてきた。それは一定の成果があったものと考えられるが、大学教員の専門性が細分化・高度化するにつれ、今日求められる教職の専

門性と乖離してきた面もあると推察される。この問題の解消に向かうために大学における教師教育と教員研修に教師力量形成研究の成果を反映させることはできないものか。教師力量形成研究では教師の職能発達を経験年数の段階で表すステージモデルとして示してきた。年次研修はその発達観と一致するので、この観点をよりどころとしたい。

Pickleは教師の職能発達について原理的に検討し、就職前から就職後に至る成熟の発達の諸要因を「職務行為次元」、「個人特性次元」、「内的思考次元」の3つの次元に区分して提示した(Pickle, 1985)。そこでは各次元について教師が発達する方向性が提示されている。ステージモデルのうち教師の熟達を表すものをエキスパートモデルと言い、これは初級-熟達の差異に着目し、教師発達を解明していこうという研究的視点である。例えば教職経験に即した教授の力量を初心者から熟練者までの5段階モデルで表したり(Berliner, 1988)、熟練教師と初任教師を比較し、教師の実践的思考様式を5つの特徴的な性格として報告している(佐藤ら1990, 1991)。若年教師と熟練教師の差異の有無を問われれば、当然差異は有ると誰もが予想できる。差異の有無でなく、質的な違いを調べたのだと主張できるが、その違いは暗黙的な能力の発揮であると報告し曖昧性が残る。これとは別に、秋田は生涯発達心理学の観点を参考に4つの教師発達モデルのイメージを提起している(秋田, 1999)。このうち「成長・熟達モデル」はステージモデルだが、「獲得・喪失両義性モデル」「人生の危機的移行モデル」「共同体への参加モデル」の3つは職能というより人間的な、あるいは個人的な背景も含めたライフヒストリー研究の視点(グッドソン, 2001)と関連する。それでも、これらは教科の固有性を表すほどの領域的な

区分を示し得ない。

以上をふまえ、本稿では体育の10年経験者研修を受講した教員を対象に、受講者から提出された「教科に関する質問」を集約する。そこから10年次教員の研修課題を検討することを目的とする。

2. 方法

愛知県で実施された10年経験者研修（体育）の受講者が提出した「教科に関する質問」を集約する。対象は平成17年度から19年度までの3年分の内容である。受講者の合計は49人（愛知県小中学校教員10年経験者）、質問内容の合計数は134問である。内訳は以下の通りである。

平成17年度 質問数21（受講者数14人）
 平成18年度 質問数48（受講者数14人）
 平成19年度 質問数65（受講者数21人）

これをPickleが区分した教師の職能発達の「職務行為次元」に着目し、この観点で質問内容を文脈的に解釈して分類する。この次元を選んだ理由は、「教科に関する質問」の「教科」が授業実践として教師の職務行為の中核をなすものと考えたからである。さらに、他の次元のうち「個人特性次元」、「内的思考次元」は教科固有の特徴を必ずしも表していないと判断し観点にしないこととした。

Pickleは「教師はそのキャリアにおいて、初期には教室のしつけのための規範か方法を学ぶ必要があり、発達ステージの後半ではカリキュラムの理論か学習の理論を学ぶ必要がある。」と述べ、「職務行為次元」を「技術的行為」、「科学的行為」、「哲学的行為」の3つの行為に細分している。ここでの「技術的行為」は教室のしつけのための規範か方法の指導になる。また、「科学的行為」、「哲学的行為」はカリキュラム理論、学習理論の適用である。本稿では「科学的行為」を学習指導への学問的知見の具体的適用とし、また「哲学的行為」を教科の理念や教育のための思索的判断として区別することとした。

以上のことから「教科に関する質問」を「技術的」、「科学的」、「哲学的」の3つに分類し、その特徴や内容から教員の研修課題を検討する。なお、分類に際して次のような手続きをとった。

- ・分類は筆者と体育科教育を専攻する大学院生の2名で行い、不一致のケースが出た場合は協議して一致させる。
- ・一つの質問が複合的な意味で解釈される場合、該当する区分が重複することもあると考える。

なお、提出された質問の分類に対して研究上次のような限界があることをあらかじめ断っておく。一つは、質問が必ずしも受講生である教師が本当に知った

いこととは限らない可能性がある。提出が義務づけられているので「取りあえず」提出した質問の可能性もある。二つ目は、質問の分類は文章化された内容に基づいており、質問の隠れた意図までは知り得ないこと。三つ目は、すべて「哲学的」分類もできるということ。教師の行為はすべて観念的判断に基づいて行われている可能性があるため、「哲学的」に一旦は含まれるが、文脈上中心的な意味として解釈することで区分する。

3. 結果と考察

分類した結果、質問数はそれぞれ「技術的」59問、「科学的」25問、「哲学的」64問となった。複合的な質問もあるので総数は全質問数の134問を超える。以下3つの区分で、具体的な質問内容を参考にしながら10年次教員の研修課題について考察したい。（質問内容は資料に掲載）

3-1、「技術的」課題

「技術的」と区分された質問を概観すると、その内容は①指導方法に関すること、②子どもへの対処、③評価方法に大別される。

①指導方法は、「効率的な授業運営の方法」、「技能差がある場合の指導方法」、「学習カードや用具の活用方法」などに関する質問である。効率的な授業運営は授業におけるマネジメントの問題であり、10年経験者教員には克服しておくべき課題だと考える。これは実践における無駄を省くことであり効率改善の自己反省をすれば可能であると考えられる。さらに、効率性の高い実践を模倣することも有効であると考えられる。技能差への対応は個別プログラムを用意することが考えられるが、それには技能差の段階に応じる方法・内容を知っている必要がある。あるいは技能差を吸収する共通の学習内容に取り組みさせることが考えられる。共通の学習内容とは基礎・基本のことである。これを一斉指導で実施することが考えられるが基礎・基本の理解が不十分な場合は困難になる。学習カードは時勢の指導観の反映かも知れないが、その端緒は最近に始まったのではなく昭和50年代からある。「どのように活用すればよいか」、「有効な方法は。」などの質問は活用経験の量的な不足から生じているものと推察される。すなわち学習カードや用具に関する質問は、活用して反省から改善に至る経験があれば、その答は生じるものとする。

以上のことから指導方法に関する質問から考えられる研修課題は自己反省と模倣である。すなわちそれは「自らの実践を振り返ること」、「他の教師の実践を見ること」になる。

②子どもへの対処は、「見学者への対処」、「グループ編成」などに関する質問である。見学者を授業場所

に同席させ把握しておくならば、それは管理という意味になる。授業運営の補助も単なるお手伝いならば管理に近いが、補助により仲間の学習成果に影響があるとすれば、それも学習活動の一つになると考える。補助とは別の学習をするなら、学習課題を見学者に提示しなければならない。そうすると「技術的」は「哲学的・科学的」に区分されるかも知れない。すなわち「見学とはいかなる学習か。」「見学で学習する課題は何か。」などを検討し、学習課題を用意しておくことが必要になる。

グループ編成は学習集団のマネジメントである。それは運動種目や学習の目的に影響される。協調する種目ならば親密な集団でよいが、競争目的ならば勝敗の未確定性を保証する等質集団にする必要がある。教師の判断で固定的グループを解体し、新たなグループ編成から子どもの人間関係を拡大させたい場合、その説得が必要になる。これには合理的な説明や教師-子ども関係の中で受容されることが求められる。

以上、子どもへの対処に関する質問から考えられる研修課題は、学習課題の検討と子どもに受容される指導にある。それは「体育の内容を考えること」、「子どもとの関係をつくること」になる。

③評価方法は、「成績処理」、「評価のための観察方法」などに関する質問である。成績は評価結果を評定化したものであるが、評定化するには評価基準が必要である。各校でそれは作成済みと考えると、機能しない評価基準になっている可能性が考えられる。すなわち形式的に整えただけか、あるいは活用されない評価基準になっているかもしれない。また、定性的な評価結果を定量的に転換する場合の処理手続きが定まっていなくてもあり得る。特に複数教師で共通理解を図る場合、その機会をつくらぬか時間が無いことも考えられる。

評価のための観察のとき、授業者である教師は指導者であると同時に観察者である。1人で複数の子どもの学習状況を同時に見ることはできないので、評価スケジュールが指導計画に含まれるていられるかが問われる。また教師は観察結果の記録者でもあり、記録に時間と視点が奪われると指導も観察もできない。そのため記録方法の改善が必要になる。

以上のことから評価方法に関する質問から考えられる研修課題は、評価基準の再考と評価手続きの協議である。これは子どもへの指導とは別に「同僚と打ち合わせる」となると考えられる。

上記のような「技術的」質問の背景には何があるのだろうか。

教科を実践すること（授業）は、合目的行為なので技術的実践としての課題意識を教師がもつことは必然である。体育科という教科の固有性として運動学習が中核にあり、座学とは異なって教室空間は拡大され、

子どもの統制が難しくなる。そのため授業運営の技術と学習指導の技術は技術の両輪になる。これらは実践経験を積むことによって効率改善の自己反省が可能である。しかし、経験を能動的に活用できない教師にはその効果は期待できない。それが教師の向上心の欠如によるものなのか、反省機会をもちにくい労働条件によるものなのかと二者択一で考えると、筆者は後者の原因が大きいと判断する。様々な説明責任の要求による書類作成や不合理的な問題が生じる今日教育環境のもとでは、教師に熟考することを求めるのは酷であろう。加えて、事例の模倣から学ぼうとする場合、教師間の同僚性の欠如も推察される。それは教職員の年齢構成も原因の一つになろうが、それ以上に同僚の実践を見る機会も減っているのではないかと考える。

以上は教師を取り巻く環境的な背景の推察であるが、教師個人としての特徴にも問題が考えられる。例えば、「具体的な方法を教えてほしい。」という直接的回答を得たいという要望は、教師成長において主体性なき態度の表れでもあり、必ずしも望ましいとは言えない。答を探し求めて行動を起こさない教師には大きな成長が望めないものと思う。また、安易な技術の適用で取りあえず授業をこなすだけでは教科の教育としては不十分である。しかしながら、取りあえずこなす授業でも職務遂行の責任は外見上果たしたことになる。この問題を克服するには教師の良心に頼るしかない。

3-2、「科学的」課題

「科学的」質問のほとんどは各運動種目の技術指導に関するものであり、他に準備運動や体力づくりに関するものがある。質問にあった運動種目は、器械運動、水泳、陸上競技そして球技である。

この質問内容の多くは「できない子」への指導で成果を上げること、短時間の中で成果を上げることである。

「できない子」の原因を本人のもつ身体能力に起因させていると、授業という限られた時間内で成果を上げることは難しい。特に筋力の不足や肥満を原因にすれば、その改善には多大な時間を要する。したがって、「できない子」への指導、短時間の指導で成果を上げるには、指導方法に合理性・効率性を求める方がよいと考える。効率性は「技術的」な授業運営で運動の頻度を上げることと関係するが、合理性は学問的な知見の中にある。

教師の中に技術に関して完成型をお手本として紹介することはできても、そこに至るための方法を紹介できない例を見る。教師の技術理解に「どうなっているか」がわかっていると「どうすればよいか」がわかっていないのである。あるいは一般的な方法を適用したとしても、通常それは競技選手に適用する一般

的な方法であり、子どもに適切とは限らないこともある。また、指導するとは多くの場合、言語に偏りやすく、抽象的な「説明、発問、助言」を子どもに与えても、具体的な「方法の提示、感覚的な合図」を用いた指導ができないことも考えられる。また、子どもの動きを個別に見ることができない可能性も考えられる。その子が動きの習熟過程でどんな状況にあるのか、恐怖心や運動経験の不足で十分な力が発揮できていないのかなど、動きの質は子どもによって異なる。それを完成型であるお手本と比較した「運動局面の欠点を指摘する無理な指導」(太田, 1995)になっていないか検討する必要がある。

以上のことから「科学的」質問から考えられる研修課題は、技術指導に関する方法・知識の理解と方法論の検討である。したがって現職教員にその方法・知識を提示する必要がある。それはあくまでも科学的知見であり、単なる経験論を提示するのではない。また科学的と言っても必ずしも精密科学や実験施設を用意するものではない。実践に直結する知見で考えると、その多くは運動学の領域になるかもしれない。

上記のような「科学的」質問の背景には何があるのだろうか。

昨今の教育観から「自ら学ぶ意欲」を引き出すための実践をするには「指導より支援」が重要であり、「教師は教えずに見守る必要がある。」などと、教育の一手段である支援を「教えないこと」と曲解しているケースが考えられる。「学習理論」など「科学的」知見をもって「教えない」ことと、それを知らないで「教えられない」ことは違う。まして、「教えないこと」が「自ら学ぶ意欲」を引き出しているかどうか疑問である。また生涯学習理念に基づく現行の学習指導要領の趣旨から「楽しい体育」の実現がある。ここでの楽しさは運動に対する欲求充足だが、それも雰囲気などの表面的な「楽しさ」として誤解している教師も多くいるのではないかと。また技能向上には練習が必要であり、古くから練習は「鍛錬、トレーニング」などのイメージで負荷、持続、忍耐をとまなうものとの印象がある。それが「楽しい体育」にそぐわないと遠ざけられていたのかも知れないが、合理的な練習は必ずしも、負荷、持続、忍耐をとまなうとも限らない。多くの場合、忍耐は不合理な練習になると考える。

3-3、「哲学的」課題

「哲学的」質問は64問あり、評価に関する質問が24問と最も多かった。あとはカリキュラム編成の在り方や体育の将来像など教科目標に関する内容と、男女共習の考え方や運動制限のある子への指導など実践から生じた判断を要する内容である。他に運動会や地域スポーツクラブ、運動部活動の質問もあったが、これらは本稿の対象外として扱わないこととする。

評価に関する質問が多いのは、評価の観点が多義的に解釈される点にある。評価の観点は学力観と一致する。学んだ結果が学力ならば、評価はその状況を見るものである。体育という教科の学力観や教科内容が教師に明確になっていないと評価の観点も曖昧になる。このことは、体育は何を学ぶ教科ということを改めて問う必要性があるものと考えられる。

カリキュラム編成の在り方や体育の将来像に関する質問も体育の学力観と関係する。カリキュラム編成では「何を教えるのか、どこまで教えるのか。」などの質問があり、教科の目標である学力が理解されていないものと推察される。これに相まって教科内容も編成することは難しくなり、その状況では教師による主体的なカリキュラム編成は望めない。それは、おそらく定型化された事例の模倣になるか、過去の踏襲になるであろう。それでも積極的にカリキュラムに関心が及ぶ教師は体育の将来像に目を向ける。「次の指導要領の改訂の要点は何か。」「今後どんな点に留意して体育を考えていくべきか。」という質問では積極的にカリキュラムを理解していこうとする態度がある。

以上、評価やカリキュラム編成、体育の将来像に関する質問から考えられる研修課題は熟考的協議や講義である。それは子どもに対する指導とは違う。教師同士の解釈を深める思索的な営みである。すなわち「考え合うこと」になる。

男女共習や運動制限のある子への指導など、実践から生じた問題は即時的に答がでるものではない。これらが単に授業運営上の問題として克服されるなら、それは「技術的」問題になる。熟考する間もなく実践は迫られるので、授業を進めていかなければならない。教師は当面の答を出すものの安易に納得できない。このことも体育の学力観や教科内容を考えることと同じではないかと思う。すなわち、男女で異なる学力があるのかどうか。ないと考えて、男女差を性差と見ず能力差と考えるという一つの判断がある。あるいは運動制限のある子は見学だけするかあるいは、特別支援学級に行くべきか。これも能力差と考え条件を工夫しながら仲間と共に学ぶものなのかなど、これまでいくつかの判断がなされている。それらの判断は言い換えれば、教科と子どもの関係を教師がどうするのかという問題でもあり、それは授業計画や授業実践などの授業を創案することに帰着する。日々授業を考え実践しても判断しにくいのは、これも熟考する判断経験が乏しいのではないかと考える。あるいは子どもの問題から考えることなく、授業を教師側からの一方的な実践として行ってきたせいかもしれない。

以上、男女共習や運動制限など実践上の問題から生じた質問から考えられる研修課題は、やはり熟考的協議や講義になろう。またその問題を共有し事例課題を増やす必要が考えられる。

上記のような「哲学的」質問の背景には何があるのだろうか。

評価に関する問題は評価観の転換が考えられる。それはまず学習指導要領改訂にともなう、いわゆる「4観点」による評価に始まり(1989年)、次いで現行の改訂(1998年)にともなう、いわゆる「絶対評価」の導入である。「4観点」には「関心・意欲・態度」や「思考・判断」など子どもの内的な状況の観点があり、現象的な学習行動だけでは十分に把握しきれないという難しさがある。これには行動観察や子どもの作成したポートフォリオ(学習カードなど)から読みとろうとする教師が多い。観察や読みとりに完全なる客観性はなく、教師の主観的な判断を払拭することはできない。そのため、測定的評価観を解釈的评价観に転換する必要があると考えられるのであるが、説明責任が求められる教師には客観的根拠をもっている必要が生じるのである。

教科目標や教科内容に関する問題は、単に熟考的になれる時間が与えられれば済むのであろうか。教科の実践を職務の遂行と考えれば技術的合理性で解決できるが、教育的な営みと考えると人間の複雑性ゆえに解決不可能なこともあり得る。そのため、消極的には問題からの逃避や妥協という対処があり、積極的には解決し続けるという対処が考えられる。

4. まとめ

今回考えた研修課題は以下のようにまとめられる。

実践の自己反省、模倣、教科内容・教科目標の検討、子どもと教科の関係の検討であり、大別すると「実践を振り返ること」と「実践を考えること」になる。

「実践を振り返ること」は日常的にも、教育現場だけでもできるかもしれない。そこに大学の知を利用するなら、授業の分析的な視点を導入し振り返る観点の枠組みを設定することである。それにより経験による主観的な反省が自己を対象化する客観的な反省に変わるものと考えられる。

「実践を考えること」も日常的にも、教育現場だけでもできるかもしれないが、昨今の教師の多忙さを考慮すると、研修という特設の機会が必要である。時間はそれだけで確保できるが、大学の知を導入すれば、熟考する課題をカリキュラム理論などの専門的な枠組みに定位できる。そうなることと一定の根拠をもつ論理的な判断が助長され、曖昧さは払拭されるものと思う。

昨今、「教師力」、「授業力」など教師の指導力向上を意味する言葉が用いられ、セミナーなどと称する講習機会がある。これらの多くは実践の「技術的」問題解決に偏っている感がある。子どもに対する「技術的」な問題解決は教師の効力感を満足させるものの、教育対象(子ども)への道具的操作を助長し、子ども

を没人格的存在として認識する可能性がある。したがって、「技術的」に傾注した研修には教育者として警鐘を鳴らさねばならないと考える。そこには「哲学的」判断が必要である。

また、「科学的」合理性は教師が学ぶことで向上できるものの、科学的知見の多くは大学で学ぶ。しかし学生にとって現実的な課題は目の前になく、受講の際の問題意識は低い。また指導経験がないと授業における子どもの実態と結びつけることはできない。それを教育実習の短期間で行うのは容易ではない。そのため大学教育に「実践的」と称して学校現場に向向く教育機会を求めるが、それをむやみに増やすことに筆者は反対である。学校現場に行けば子どもの実態と大学の指導内容は結びつくと考えられるが、結局はそこでも学生に現実の問題意識がなければ効果は期待できない。そこで大学教育を見直す必要がある。それは大学教員が現実の問題意識と指導内容を結びつけて学生指導することである。これは大学教員の研修課題になると自覚していきたい。

5. 参考・引用

- 秋田喜代美(1999)「教師が発達する道筋 — 文化に埋め込まれた発達の物語 —」『授業で成長する教師』第3章pp27-50 ぎょうせい
- Berliner,D.C.(1988) *The Development of Expertise in Pedagogy*. Charles W. Hunt Memorial Lecture
- グッドソン.I.F(2001)藤井泰,山田浩之編訳「教師のライフヒストリー — 『実践』から『生活』の研究へ —」晃洋書房
- 文部科学省(2002)14文科初第575号通知
- 森勇示(2004)「教員養成大学における教育委員会と大学の連携 — 愛知教育大学における保健体育科の『10年経験者研修』 —」愛知教育大学保健体育講座研究紀要29巻pp31-40
- 西穰司(1994)「現職研修と大学の役割」牧昌見・佐藤全編集『日本の教育第四巻学校改善と教職の未来』教育開発研究所pp93-122
- 太田昌秀(1995)「つまずきの見つけ方 マット運動の後転」『学校体育』第48巻3号日本体育社pp2-3
- Pickle,J(1985) Toward Teacher Maturity, "Journal of Teacher Education, Vol.36.No.4 pp55-59
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美(1990)「教師の実践的思考様式に関する研究(1) — 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に —」東京大学教育学部研究紀要第30巻pp177-198
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美・吉村敏之(1991)「教師の実践的思考様式に関する研究(2) — 思考過程の質的検討を中心に —」東京大学教育学部研究紀要第31巻pp183-200

6. 資料

資料 質問内容と分類結果

No.	質 問	分類
1	とくに個人技能を高めるような運動（器械運動や陸上運動、水泳など）で授業の中では、自分の能力に適した技やめあてを設定させて行っているが、実際には「6年生ならばここまでできるようにさせたい」という教師の思いがあり、技能の評価は一律の評価基準に到達しているかを見て行っているのが現状である。このようなギャップをどのように考えたらよいか。	哲学的
2	基本的な授業の流れ	技術的
3	評価基準について	哲学的
4	学習カードの作り方と使い方	技術的
5	「関心・意欲・態度」「思考・判断」の評価をどのようにつけばよいか。（基準をどうすればよいか）	哲学的
6	できない児童に対して、どこまで指導すればよいか。（どの時点で評価すればよいか。）	哲学的
7	小学校高学年では、男女の技能差が大きくなり、とくにサッカーやバスケットボールなどの球技では、男女が一緒にゲームを行うのが難しくなる。高い技能を持つ者も低い者も、適度な運動量を確保し、ともに満足のいく授業を展開するために、どんなことに留意して授業を組み立てていけばよいか。	技術的
8	準備運動について 体育の授業の始まりで欠かせないのは準備運動である。しかし、実際の準備運動と言えば、脚部の屈伸に始まり、アキレス腱伸ばし、跳躍などのオーソドックスなタイプをただひたすら慣例のように繰り返しているだけである。本当にこれでいいのだろうかという疑問がわき起こってくる。身体の特性を考え、新たな準備運動を考案すればいいのだが、準備運動にスポーツを当てた実践の報告例は乏しい。学校の生徒たちは、体育以外の授業では圧倒的に長時間にわたって、座ったままの状態である。それが、体育の授業になると急に身体を動かすことになる。教材の内容によって運動強度に多少の差はあるにせよ、いずれにしても身体に対してかなりの負担があることは、誰にでも容易に想像できるはずである。本校の体育の準備運動を考えても現状では、とても十分なものとは言えない。そこで、身体面において今よりもさらに運動する状態にもっていきやすい準備運動とは何かを知りたいと思っている。	科学的
9	魅力ある水泳の授業づくりにはどんなものがあるか。 年々（特に女子）を中心に見学者が増えているような気がする。泳ぎそのものも下手な生徒が増えたのではないかと。授業時間数の減少もその一因にあると思う。今年、中学3年生で「シンクロナイズドスイミング」を取り入れてみた。グループに分け意欲的に取り組み始めた。学校を休みがちで水泳の苦手な子どもも、積極的に参加している。クロールや平泳ぎも「シンクロ」の中に取り入れ、教えあいも生まれている。このように、見学者も少なくなるような、魅力的な水泳の授業には、どんなものがあるか。	哲学的
10	中1の水泳の授業について現在学年全員（100人）を一度に見ている。課題解決学習にしようとして、上手な生徒と下手な生徒が均等に分かれた等質のグループを作り、グループ内で練習計画を立て、教え合いを主とした授業を行っている。中1だと、なかなかうまく上手な生徒が泳げない生徒に教えることができないが、何かいい方法はあるか。	技術的
11	球技の授業について現在、球技においても等質グループを作り、グループ内で練習計画を立て、チーム内で課題を克服しながら仲間とかかわっていく授業をしている。チーム内のかかわりの中では、助言や励ましはしやすいのだが、全員を集めて、全体でのかかわりの場をもつことがなかなか難しい。全体を集めて、意味のある関わり合いをしたいのだが、どんな方法があるのか。	科学的 哲学的
12	器械運動の補助の仕方はどうすればいいか。	科学的
13	球技で効果的なグループ分けの方法。	技術的
14	見学者の扱いをどうすればいいか。	技術的
15	時々（水泳や長距離走）「さぼっているのではないかと」と疑われる見学者がいて気になります。どのように対応したらよいのでしょうか？水泳では、生理のため一度もプールに入らずに終わってしまう子も出てきそうです。夏休みに補習をする予定ですが、それでも入れない（入らない？）場合、評価をどのようにすればよいのでしょうか？	哲学的
16	ドクターストップで、体育の制限がある子がいますが、評価をどうすればいいのでしょうか？	哲学的
17	後方倒立回転（いわゆるバク転）を身につけさせるための指導の過程、場の工夫、補助の仕方など効果的な指導について知りたい。	科学的
18	学習カードの効果的な活用方法（何を書かせるか、いつ書かせるか、書かせる分量、カードの形式）について知りたい。	技術的
19	中学1年生で初めて柔道を教材として扱うときに、身につけさせる技はどんな技がよいか。現在では、体落とし、出足払い、けさ固め、横四方固めをやっています。	技術的
20	陸上の長距離走でタイムトライアルをするときに、各学年で走る距離としてはどの程度が妥当なのか。現在は1年生男子1500m女子1000m、2年生男子2000m、女子2000m、3年生男子3000m、女子2000mをやっています。	科学的
21	準備運動について ウォームアップとストレッチと併せて短時間（5分）でできるもの、授業時、どの先生が担当しても簡単に指導でき、生徒たちも容易に取り組みるものという2点について欠くことのできない要素として考えられる。これら4つの要素を満たす準備運動があれば知りたいと強く思っている。	技術的
22	体力低下が叫ばれているが、世間から学校体育に求められているものは何か。	哲学的
23	限られた場（ゴール・マットなど）で、いかに生徒の運動量を増加させるか。	技術的
24	学習カードはどれくらい使用していますか？また、どれくらいの時間を記入に使用しますか？	技術的
25	なぜ体育の時間数が減ってしまったのか。（知育・徳育・体育が三本柱と言われ、最近では「食育」のように身体に関する大切な考えも出てきているがなぜなのか）	哲学的
26	授業数も少なく、なかなか技能の定着が達成できずに悩んでいる。なんとか技能を定着させていきたいと考えている。しかし、技能ばかりにこだわりすぎてよいのだろうか。他にも保体として授業で伝えることがあるのではないかと考える。この単元ではこれだけは絶対にできるようにさせるという最低限ここまでできるようにしてほしいという達成目標を持つことは必要なのだろうか。また、どこまでそれにこだわればよいのだろうか。	科学的 哲学的
27	中学校の保体の授業を展開するにあたって、生徒ひとりひとりの能力差が非常に大きいことに戸惑っている。部活動で毎日その種目を行っている生徒から運動が苦手な基本的な技能もまだ身につけていない生徒まで同じ集団にいる。非常に大きな能力差がある。運動能力の高い生徒は発展的な内容に取り組み思いっきり活動をしたと思っている。しかし、苦手意識を抱えている生徒は基本が身につけていないので、まずは基本技能の練習が必要である。このような中で、ひとりひとりが自分の課題を持って取り組むことができ、その種目の特性を感じ、楽しく活動できる授業を行ってほしい。そのための指導方法や留意点など、保体の授業を展開、計画していくにあたって、必要なことを教えていただきたい。	技術的
28	保健体育の授業を行う際、個人の能力差を考慮しなければならない。得意な生徒も苦手な生徒も共に達成感・満足感を味わうことができる授業についての具体的な方策。	技術的
29	いろいろな授業でのアイデア教具を教えてください？ ・予算の関係上、器具が不足していたり、全くなかったりする場合があります。そのため、手作りの教具を使って授業を行うことがあります。手作りで用意できる代表的なアイデア教具を教えてください。	技術的
30	グループ編成を行う時、同じぐらいの能力になるようにグループ編成を行う場合と、能力別にグループ編成を行う場合があると思いますが、どのような場合にどのような方法で行うのがよいか教えてください。また、教師が行う場合と児童（生徒）が行う場合があると思いますが留意する点があれば教えてください。	技術的
31	チームやグループを編成する場合、種目によってどのような編成の仕方をするよいか、教えてください。また、うまくいかないチームやグループに対する支援のあり方で、参考になるような例があったら教えてください。	技術的
32	活動が活発になるグルーピングの仕方。	技術的
33	生徒の動きをしっかりとはみれていないので、けが人を出してしまっているが、体育の各種目でケガをしやすいもの、注意すべきタイミングを教えてください。ケガや病気で体育の授業を一時的又は、全く受けられない生徒の対応をどうすべきか教えてください。	技術的 哲学的

森：保健体育10年経験者研修の課題について

63	体育の授業に費やす時間数に対して、保健の授業時間数と授業の進め方が十分にできていないように感じる。定期テスト前に保健の教科書の内容を終えるのに精一杯で、実習や実技が行えていない。どのような保健学習の進め方があるのか、ぜひいろいろやり方を教えていただきたい。	技術的
64	めあて学習が児童（生徒）の意欲を高めたり、課題意識をもって学習に取り組むために有効であることは分かりますが、めあて学習にしっかり取り組もうとすると、活動時間や運動量が減ってしまうことがよくあります。めあて学習の効果的な進め方や留意する点について教えてください。	技術的
65	バスケットボールやバレーボールなど集団スポーツにおいて、めあてを考えさせるとき、チームの課題と個人の課題が出てきますが、どちらを先に考えるのか教えていただきたい。チームにおける自分の役割を考えるという観点から、チームのめあてが先あって、その上で自分のめあてを考える場合と個を大切にするという観点から、個人のめあてを考えさせたい一方で、個を生かすようなチームのめあてを考えさせたいという場合があると思います。どのような考え方で進めるべきか教えてください。	哲学的
66	最近では、子ども会等でもラジオ体操をやっている所が減ってきていると聞いています。運動会でも学校独自の準備体操を行うところが多いようです。普段の体育の授業でもその種目に合わせた準備運動があります。わざわざラジオ体操を取り入れることもないと思います。教育として、ラジオ体操は知っておかなければならないものであれば、指導しないといけなく考えますが、そうでなければやる必要性がないように感じます。学校としては指導すべきものでしょうか。	哲学的
67	体育のT・Tの利点とは何か。	哲学的
68	小学校では、担任の力で大きく変わるものは技能教科だと考えています。その中でも体育は、クラス格差の出やすいものです。小学校でも技能教科については、専科を置くべきだと考えていますが、各校や県での取り組みを教えてください。	技術的
69	体育授業の目標を達成するための指導内容と部活動や大会で結果を残すため指導内容は大変異なっていると感じる。教師主導の部活動や訓練のような授業であっても、体カテストや諸大会で結果が残ればよいのではと感じることがあり、自分の指導に自信が持てない。	哲学的
70	○リレーのバトンパスの技能評価 フォームを評価したいと考えているが、グループ間の距離が開いてしまうと、視点が定まらず、評価したいポイントを見逃してしまう。だからと言って、評価だけの為に走らせたくないの、よい方法があったら教えてください。	技術的
71	○球技の技能評価 ゲームの評価を行うとき、ボールに触れなかった生徒の評価が難しい。バスケットボールでは、ボールに触れてなくても、ディフェンスなどの動きがあるので評価しやすいが、バレーボールでは、ある生徒のところにボールが来なかったり、球技の得意な生徒が、どうしてもボールをとってしまうことが多くなったりするなど、全員の評価がしにくい。カバリングなどの動きもあるが、ボールを扱っている生徒にどうしても目がいってしまいがちになる。私の勉強不足、力不足、工夫不足ではあるが、どのような評価ができるか、教えてください。	哲学的
72	2. 体育の授業を行い評価する際に思っていること 体育の評価の観点が、「関心・意欲」「思考・判断」「技能」「知識・理解」の4つに分かれているが、その区別が難しく評価しづらい。また、それぞれの観点が1:1:1:1であることが望ましいといわれているが、どうしても技能の値に重きを置いてしまう。また、「思考・判断」と「知識・理解」をどのように評価していけばいいかを知りたい。	哲学的
73	2体カテストの実施方法・評価への算入について 本校では体カテストを保健体育科の授業において5～7時間ほどかけて実施している。限られた授業時数の中において5～7時間は非常に大きい割合を占めてしまう。全校や学年単位で半日程度を使って一斉にやっている学校もあると聞けが、学校事情により難しい場合もあると考える。また、体カテストの結果を「陸上競技」として評価に含めることに少しためらいも感じることがある。「指導」→「評価」の過程の「指導」の部分を（時間的に）十分におこなえているのかという疑問が残る。	哲学的
74	評価について 評価基準や評価場面を設定し、記録していくが、毎日の授業で全ての子どもを見るのはほとんど不可能に等しい。子ども達の自己評価や他者評価も参考にすると、なかなか厳しい。個人差を配慮し、一人一人のめあてを立てさせ、挑戦させる単元の流れを組んでいくが運動の持つ特性に触れ、学年に応じた基礎技能の習得はねらっているので、技能の評価として「めあては達成できたが評価は低い」という結果になってしまう子もいる。中学校では、知識として考える運動のルールなどを小学校では、そのルールを工夫したり変えていったりすることを楽しもうとする。ルールを変え、問題点が出てきたらまた話し合いを行う。これを繰り返す。しかし、最後は従来のルールが一番楽しいという結論にたどり着くことが多かった。技能が低い子にとってはつらいルールかもしれないが。	哲学的
75	⑨評価基準（技能への比重など）	哲学的
76	実技評価の工夫について 実技領域では、個人の能力差が大きく現れる。実技の出来や、記録は重要な要素である。しかし、個人のもっている運動能力を評価することは、学習を通しての評価ではない。記録の伸びや、課題への達成度を評価したい。そのための、評価項目や、評価規準を工夫したい。また、個々の学習の様子や変化を的確に捉え、適切に評価をしたい。	哲学的
77	実態にあったよい評価方法とは 昔にくらべ体力が低下しているが、評価基準をかなり低くしないと高い評価ができない	哲学的
78	体育の評価の観点は、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」「知識・理解」の4つの観点に分かれています。しかし、評価をするときには、目的に添った評価をしていくことになるため、実際に技能を評価していくときに、「思考・判断」がともなっていない生徒は、「技能」の得点が低くなるように思っています。即ち、「技能」の評価の中に、「思考・判断」の評価も内包されているのではないかと感じます。やはり、「思考・判断」という、評価の観点は必要なのでしょうか。	哲学的
79	評価について 学習ノートで評価することは、純粋な体育の評価だとは言えないと思いますが、毎時間の子どもの活動も、同じ観点で全員公平にチェックしていくことはかなり難しいことです。目立つ子については比較的评价は容易ですが、そうでない子については、授業中、できる限り多くの子に声をかけるように努め、記憶に新しいうちに名簿などに記入していくことで評価しています。もっと効率よく、適確に評価できる方法を教えてください。	技術的 哲学的
80	評価方法について 「教師の役割として、条件を整える（マネージャーとしての役割）、助言を与える（アドバイザーとしての役割）、積極的な関わり（インストラクターとしての役割）が求められる」とある。これらの指導に加えて評価活動も随時していかなければならない。T・Tの体育授業を設定することができず、すべての指導と評価を1人で実施する場合は現状であるため、効率よく適切な評価を実施する方法について伺いたい。	技術的
81	評価方法の工夫について 生徒の実態を把握して評価規準を作成することは、生徒にどのような力をつけさせたいかが明確となり、生徒の課題や、課題解決の手立て、授業展開も組立てやすくなる。評価規準が明確なほど、生徒を適切に評価できると考えるが、各観点の評価規準をもとに、一単位時間の中ですべての観点を評価することは困難である。したがって、一単位時間の中で何を指導し、評価するのか。また、指導計画の中で、いつ、どの観点を評価するのかを工夫したい。	哲学的
82	○体育授業の中で、「生徒同士の関わり合い」を大切にしたいと思うが、「関わり」→「共に高める」有効な手立てはどんなものがあるのか知りたい。 ・ペア（チーム）学習などでの教え合いはよく設定するが、「深まり、高め合う」までには至らないことが多い。	技術的
83	低学年では、器械運動という領域はなく、器械・器具を使つての運動遊びとなっている。他にも、走・跳の運動遊び、用具を操作する運動遊び、水遊び、表現リズム遊びなど、運動遊びという言葉がたくさん使われている。運動遊びという言葉には自由に好きなように運動するという意味が強いように感じるが、実際は教師指導の下で目標を掲げきまりを守って運動し評価を受けているので、遊びという言葉が合わないように感じている。運動遊びという言葉をつけたことにはどのような意味があるのか	哲学的
84	・意欲を高める授業展開 生徒が楽しんで意欲を高められる導入やる気させる授業展開 全体指導と個別指導	技術的
85	体育のよい授業とは 授業では生徒に対し、注意しがちになってしまいます。	技術的
86	平成17年度中教審の「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」で、すべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは？を受けて、体育の目的の具体的な内容（すべての子どもたちが身に付けるべきもの）を考えると、体育の授業を通じて、すべての子どもたちに、一定（ミニマム）の「身体能力」、「態度」、「知識、思考・判断」などを身に付けさせることが必要であると述べている。そこで、※今後は、どのような流れになるのか。※評価は、「身体能力」、「態度」、「知識、思考・判断」という観点別評価になるのか。	哲学的

87	今（今後）求められている（いく）、体育の授業は、何をめざしていく授業なのか教えてほしい。これまでの経験から、「楽しさを追求する授業」「教師が教え込む授業」「仲間との関わりを大切に授業」を行ってきた。どの指導方法もよい面があるが、体育の授業として、何をめざして、授業を展開していったらよいのか悩むときがある。「楽しさを追求する授業」では、ルールを工夫したりしながら、多くの生徒が楽しみながら活動できることをねらいとした。その結果、活動自体は楽しくなるが、技能の高まりにやや物足りなさを感じることも多かった。「教師が教え込む授業」では、技能の高まりは感じることができているが、できる生徒とできない生徒がはっきりしてくることも多く、生徒どうしの関わりが薄くなることも感じられた。「生徒どうしの関わりを大切に授業」では、お互いに教え合う場面が見られるが、話し合いの時間が多くなったり、運動量が減ったり、技能が高まらなかつたりすることもある。いろいろな授業展開をしていく中で、体育の授業で大切なことは、「できるよるこびを味わわせる」ことだと考えるようになってきた。その達成感を味わわせるためには、教え込みながら生徒どうしが教え合う授業が大切だと感じている。体育の授業が、どのようなものを求めているのかを教えてくださいながら、今後の方向性を考えていきたい。	哲学的
88	②子どもたちの体力の低下、二極化の現象から、体育の基礎・基本の見直しが問われている今、学校体育に求められているもの、そして何を基礎・基本ととらえていけばよいのか考えを聞かせていただきたい。	哲学的
89	学校週5日制に伴い、体育科の授業時数が105時間から現行の90時間に削減された。また、脱スポーツ種目型であり、「体への気付き・体の調整・仲間との交流を目的とした」例はむしろ減少している。施設や設備の条件等、地域や学校の実態によっては他のボール運動（タグラグビー、テニス、セストボールなど）のニュースポーツも弾力的に取り組まれてきているが、基本技能の定着を懸念する声もある。小学校学習指導要領の次の改訂に伴い、ボール運動領域にタグラグビーが必修種目化される可能性もあるようである。競技スポーツとしての学校体育よりも生涯スポーツへの流れが強まってきているとも考えられる。	哲学的
90	診断的評価から実態を把握し、単元を構想したり、単元後の総括的評価で授業を改善したりしてきた。充実していたと感じる単元では、子どもたちの評価結果も高いものであった。しかし、この評価そのものがどれほど信頼性や妥当性があるかは疑問であり、決して満足するべきではないと毎回感じている。体育の授業は、楽しいと感じながら取り組むことが大前提であるが、何に楽しさを置くかは指導者の考え方によって大きく変わってくる。技能のコツをつかむ場面、仲間と考えたり教え合ったりして関わる場面、練習の成果を発揮する発表会や試合の場面など、心身の双方において向上を図ることが必要であると考えられる。もちろん、それらをクリアするために教師の緻密な準備や支援が必要であるが、体育科の授業に求められることについて。	哲学的
91	子どもたちの体力、運動能力が年々低下してきている。新体カテストの結果を見ても、自分が中学生だった頃などと比べて、明らかに記録が低い。原因は、食生活や生活環境の変化、骨格・体格の変化、幼い頃の運動経験などいろいろなことが関係しているのかもしれないが、努力すれば改善されるというものばかりではない。そこで、健康な生活のために今の中学生に「体のここだけは最低限鍛えておくとよい」と重点的に指導していくとしたら、一番のポイントとなる部分はどこでしょうか。理由や補強の方法なども知りたい。	科学的
92	本校では3年間の学習によって、様々な種目に取り組めるよう年間計画を立てている A：18時間（マスケームを主に） B：18時間（マット運動・跳び箱運動） C：45時間（短距離・リレー・ハードル・走り高跳び・走り幅跳び・長距離走） D：27時間（水泳） E：61時間（バレー・バスケットボール・ハンドボール・サッカー・球技選択） F：30時間（柔道・剣道・選択（3年）） G：0時間（ダンスは女子のみ） H：9時間（保健） 合計：264時間（3年のみ年間84時間で計算） 武道、水泳、長距離走などは、3年間で授業を行っている。そのため、3年間で技能や体力の高まりを生徒自身はもちろん、指導者も実感できる。しかし球技などは、それぞれの種目を1学年だけで実践するのみで、配当時間も8～10時間程度である。「広く浅く」「いろいろな種目に」ふれることをねらいとしているので、このような年間指導計画で実践しているが、これでは生徒の体力や技能の向上はなかなか難しいというのが正直な思いである。生徒の体力・技能を高める年間指導計画はどうあるべきかを教えていただきたい。	哲学的
93	以前マラソンの強化期間中に、全校で一定時間ジョギングをする計画を立てたが、学習指導要領の[例示]によると、1、2年生はかけ足（2、3分間程度）、3、4年生はかけ足（3、4分間程度）、5、6年生は5～6分間程度の全身運動とあるため、学年ごとに目指す時間が違うという理由で、計画は変更となったことがある。この[例示]は、最低ここまでという最低ラインを示すものであるのか、それともこれ以上はやってはいけないという最高ラインをしめすものであるのか、あくまでも例示であり、学校の実態に応じて変えていいものなのか教えていただきたい。	哲学的
94	① 学生期から高校生までを一つのくりとして考え、子どもたちにいつ、どこで、何を学ばせると良いのか、体育の系統性を教えていただきたい。	哲学的
95	⑦ 体育大会をどのような種目で行っているのか（特に中学校・競技会的なものなのか）	哲学的
96	男女共修授業について 本校では、男女に分けて授業を行っている。本年度、初めて男子の授業を担当することになって、男女共修、男女別の授業形態のあり方についてあらためて興味を抱いた。全国的にどれくらいの割合で男女共修の授業が行われているのか、今後の流れとしてどんな授業形態がよいのか、教えていただきたい。	哲学的
97	③ 男女共習で大切にすべきことを。そして、技能差、体力差をふまえて、生徒たちができる喜びを感じることでできる授業の方法や評価の方法、活かし方について教えていただきたい。	技術的
98	○ 男女共習授業の有効的な授業展開を教えてください。 ・人数の違い ・能力レベルの違い など	技術的
99	学習カードについて 毎時間の課題や、課題解決の手だて、自己評価、記録、取組技などを、学習カードに記入させることは、生徒にも教師にも授業の取り組み方がはっきりとわかり、ふり返りもしやすい。簡潔で記入しやすい学習カードを作成し、生徒の記入内容をもとに、次時の課題解決につながるようなものにした。課題や課題解決の手だてを明確にすることは、生徒の学習意欲を高めるうえで大変重要である。したがって、本校では多くの単元で学習カードを活用している。水泳のように、学習カードが活用しにくい単元もあるが、どの単元にも活用できるような学習カードの内容を工夫していきたい。また、課題解決の手だての糸口となるような参考資料を作成していきたい。	技術的 哲学的
100	学習ノートについて 短い時間で書け、かつ、子どもたちの成長にとって効果が大きく、また、評価しやすい学習ノートを作るために、これだけは押さえておきたいポイントのようなのがあったら知りたいです。	技術的
101	自己評価の活用方法について 学習カードで自己評価を行っているが、現状は記入するだけになっていることが多い。成果や反省が、教師からの励ましや支援のための材料となっていない。授業では技能面の支援に時間をかけているので、個々の自己評価をもとに、意欲、思考、技能の変化をつかみ、次時の支援や励ましとして活用できるようにしたい。また、教師の評価と生徒の自己評価がほぼ一致すると、その生徒は、正しい判断ができたと考え、一致すれば良いのだろうかと感じている。生徒には、今回は一生懸命やったという「自己満足」の評価傾向が見られる。特に○や△などの記号での記入は、基準があいまいなため、教師の評価と一致することは多い。関心・意欲・態度に関する自己評価は、生徒が正しい自己分析ができるよう内容を工夫したい。	技術的 科学的
102	ノート形式は、自己評価が主であったが、7年前から相互評価を取り入れたら、アドバイスカードと題して交換する時間を設けたりした。書く時間の削減とともに内容の充実を求めて改善を加えてきた。子どもたちの思いやつまづきを教師が把握する術として体育（学習）ノートは必要と思われる。ノートを体育学習に取り入れる際に必要最低限項目や望ましいノート形式等について伺いたい。	技術的 哲学的
103	⑧ 学習カードにどのような工夫をしているか	技術的
104	・地域社会との連携について ※地域のスポーツクラブが盛んになってきている。地域のスポーツクラブと学校体育の協力をどのようなかたちで進めていけばよいか。	哲学的
105	○ T・T指導について 本校では、T・Tによる体育の授業を行っている。T・T指導のねらいは、子どもたち一人ひとりの個性に応じ、一人ひとりに力をつけるということ。まずは、一人ひとりに目を向けた指導が成り立つことがあげられる。その指導形態は、協力型や個別型などがあげられる。場に応じて、どの型が合うのか考える必要がある。しかし、現状では一人が全体を指導し、一人は見学者の指導に当たっているということもある。上手に、T・T指導の効果が上げられていないようにも感じる。また、T・Tの課題としては、評価の仕方がある。「関心・意欲・態度をどうとらえるか」ということ、「技能面をどう見るか」ということである。それをどう共通の目で見ると、どう幅を持たせるか、揃えていくか、それを考えていく必要があると感じている。そういう観点から、「T・T指導の在り方」について教えていただければと思う。	哲学的
106	チームやグループを編成する際に、種目によってどのような編成の仕方をするとういでしょうか。また、うまくいかないチームや、納得できない子どもに対する支援のあり方で、参考になる方法があったら教えてください。	技術的
107	① マット運動の苦手な児童への指導方法が知りたい。 ・後転のできない児童への指導方法 ・倒立のできない児童への指導方法 ・肥満傾向の児童への対応（がんばってもできない児童）	科学的
108	○ 水泳の指導の在り方について 本校では、6月の末から水泳の指導に当たる。テストなどの関係もあり、毎年この時期からである。さらに、今年は時間割の変更に伴い、7月終わり（夏休み以前）までを考えると水泳の時間にあたるのは5～6時間である。これでは、十分な指導ができなと感じる。評価のために授業を行っているようなものである。この時間の中で、どれだけ生徒が泳力をのびせたか、充実感を見出せたか、大いに疑問が残る。改善点としては、年間の授業時間を計画的に組み込むこと。さらに、短い時間の中でも、効果的な指導を探ることがあげられる。果たして、この時間での効果的な指導法としてどんな方法が考えられるのか。	科学的

森：保健体育10年経験者研修の課題について

109	○水泳の授業の取り組み方と水着について ・タイム計測が主の授業 ・スクール水着になることを嫌って授業に参加できない生徒 ・生徒も喜ぶ、有効的な技術指導（とにかく実質水につかっている時間は少ない）	技術的
110	2. 水泳指導について 水泳指導は2クラス合同の57人で行っている。学年57人中50m以上泳げる児童（イルカコース）は14人、25m以上50m未満（イルカコース）は10人、10m以上25m未満（マンボウコース）が20人、10m以下（カメコース）13人である。イルカコースのほとんどはスイミングに通っている。水泳指導中は泳力を付けるため、遠泳指導を行っている。担任2名がマンボウコースとカメコースをそれぞれ指導しながらイルカコースを見ている。マンボウコースは、クロールの息継ぎがうまくなくて25m泳げるようになりたいという目標があるため息継ぎの仕方を重点的に指導している。問題はカメコースである。3年生までは小プールの浅い方で泳いでいたため、5m以下の泳力しかない児童は足が着かない恐怖心から、なかなか進歩しない。水に顔を付けられない児童1名は特に怖がり、顔を上げたまま泳ごうとしている。このように、ふし浮きもできない児童から、バタ足で10m泳げる児童など能力差が大きい。水慣れから10m程度泳げる児童までの13人を一人で指導する場合の効果的な指導法を教えてください。	科学的
111	②水泳の苦手な児童への指導方法が知りたい。 ・水に恐怖心をもっている児童への指導方法・息継ぎがうまくできない児童への指導方法	科学的
112	3水泳（平泳ぎ）における「あおり足」の矯正方法 平泳ぎの足遣いには筋力はもろく調整力（巧み・柔軟性）が必要になってくるなどなかなか矯正することが難しい技能の一つである。さまざまな取り組みを試みるが矯正できる確率はかなり低いのが現状である。	科学的
113	④水泳の授業の指導（短い時間の中でどう指導しているのか）	技術的 科学的
114	○「体ほぐし」の具体的実践例、有効的運動方法などを教えてください。 ・授業初めの5分～10分程度のもの	技術的 科学的
115	○陸上競技 決められた時間で、技能を高めさせるのが難しい。特に、走り方が身につけていない生徒をどのように指導すればいいか教えてください。	科学的
116	○長距離走のための、授業でできる有効的なトレーニング方法は？	科学的
117	③鉄棒の苦手な児童への指導方法が知りたい。 ・逆上がりのできない児童への指導方法 ・肥満傾向の児童への対応（がんばってもできない児童）	科学的
118	○選択授業（2・3年生週1時間）の持ち方について。 ・現在は、卓球・バドミントン、インディアカ、テニス、ソフトボール、アルティメットなどをやっているが、レクリエーション的要素がかなり強い。	技術的 科学的
119	1. 体育の授業を行う上で、疑問に思っていること 現行の指導要領になってから、球技の単元で、「チームの課題や自己の能力に適した課題の解決を目指して、ルールを工夫したり作戦を立てたりして練習の仕方やゲームの仕方を工夫することができるようになる」とある。初めの授業（ねらい1）から、ゲームを行っていくように指導書にも書かれているが実際どうしていくべきだろう。バレーボールのように、人数を少なくし、バドミントンのネットなどをを用いたゲームを行っていくような種目もあるが、ソフトボールのように、ある程度基礎技能を練習してから出ないと、なかなかゲームに入っていけない種目もあるのではないかと。	科学的
120	③ソフトテニスの授業の進め方（場所・ラケット・ボールの制限）（なかなか上達しない）	科学的
121	○見学者の授業参加。 ・ただ見ているだけでなく、見ながらも参加している事を感じさせたい。	技術的
122	1見学者への評価について 体育の授業を見学する生徒には先天的な障害や後天的（一時的）な病気やケガなどの理由がある。いずれの場合も見学者カードや可能な範囲での授業への参加等を評価（関心・意欲・態度、思考・判断、知識・理解）の対象として対応しているが、技能の観点の評価は不可能であり、技能の観点の重みの大きい保健体育科では評価は低くなってしまいう傾向にある。仕方がないといえどもそれまでだが、何かよい方法はないかと思う。	哲学的
123	⑤見学者に対する指導（役割などを与えているか）	技術的
124	1. 個に応じた指導について本年度は、4年生（男子18人女子10人）を担当している。男子が多いせいか、体を動かすことが好きな児童が多い。しかし、個人差が大きくマット運動においては、側転を上手にできる子（5人）腰を上げることはできる子（13人）川渡りならできる子（8人）腕の力が強くて腕立てができない子（2人）など様々である。また、その中には発達障害の男児がいる。この児童は、運動好きだが、マットが苦手な授業になると机の下にもぐりこんで出てこない。そういった児童がいる中、個に応じながら一人で一言指導するにはどうしたらいいのだろうか。児童相互で教え合う力が付いていけばいいのだが、4年生ではまだ積み重ねが少ないために無理である。	技術的 科学的
125	○準備運動について 本来、準備運動では、①身体を温める（ウォームアップ）②関節および腱、筋肉を柔らかくする（ストレッチという2つの要素が必要不可欠となるであろう。なぜなら、①と②があって初めてけがの予防や運動を始める準備が整うからであり、この2点を確実に押さえた準備運動を開発すればよいと考えられる。しかし、ここで問題になるのは時間である。自分自身がスポーツの競技者でもあることから、練習や試合前の体の状態を思い浮かべると最低15～20分の準備運動が必要だと感じている。しかし、授業時間は50分という短い時間に設定されており、本格的な準備運動をしていたのでは、メインとなる教材の実践が十分に取れない状況となる。そこで、上記の①、②と併せて、③短時間（約5分）でできるもの④授業時、どの先生が担当しても簡単に指導ができ、生徒たちも容易に取り組みできるものという2点についても欠くことのできない要素として考えられる。これら、4つの要素を満たす準備運動があれば、知りたいと強く思っている。	科学的
126	○体力低下について 走れない・投げられない・跳べない。そんな子どもが増えてきている。スポーツテストを行っても、記録が上がらない。投げ方やとび方を教えて練習しても、あまり変わらない。少し以前から「体ほぐし・体づくり」が叫ばれていて、取り組んでいる。しかし、体ほぐしの運動でさえ、できない子も多い。友達とペアを組んでストレッチで、背中を合わせて相手を持ち上げる時、支えきれずに相手を落としてしまったり、バランスをくずして倒れてしまったり、支持したりバランスをとったりすることが弱くなっている。基礎的な体力や体のバランスをとる力自体が低下しているの、もっともっと基礎的なことから鍛えないと技能向上は望めないのかな。	科学的
127	・体力向上について 昭和60年が体カテストの結果のピークであり、その後、児童・生徒の体力低下が問題になって久しい。しかし、その一方で運動が得意な児童・生徒は専門的な技能を積極的に身に付け、そうでない児童・生徒はほとんど運動をしないという運動の二極化が著しいと思われる。※教科体育としてどの層の児童・生徒を対象にして授業に取り組みはよいか。	哲学的
128	○体育の道具 ニュースポーツに取り組みさせたいと思っても、道具がないと始められないものもある。他にも、陸上の練習で器具がこわれたりしてもすぐには買えない。体育の備品は値段も高いのですぐに購入というわけにはいかない。古くからあるものはどんどん劣化していきがなかなか新しくできない。お金が足りないんだな。事務の方にはよくしてもらっているが、ある同僚の人が「体育教師の一番重要なことは、予算をどれだけ多くとれるかだ。」と言っていたが、まさにその言葉が身にしみる。今年度は、ボールも予備が底をつき、マットも跳び箱もぼろぼろ。ハードルは市の会計で買ったものをレンタルしている有様だ。器具をよくすると子ども達も選択肢が広がるのだろうか。	技術的
129	①話し合いと運動量の両立	技術的
130	○知識を教えるだけの「保健」授業の改善策 ・視聴覚機器の有効活用方、または教材 ・インターネットを使った授業展開方法 ・実際に生徒の興味を引き出す、教材？	技術的
131	⑥生徒用の帽子はあるのか（特に夏）	技術的
132	・正しいストレッチ、準備運動の方法について オーストラリアの教育では、首や膝などの関節を回す運動や、足を交差した状態で前屈をするストレッチなどは関節や腰を痛める危険性が高いということで避けられているらしいと聞いた。（確かな情報ではない。）私の幼少の頃は、うさぎ跳びの危険性や、運動時の水分補給の大切さを知らずにいた。知らずにやっていることで、問題のある運動があったら教えてください。	科学的
133	②雨の日の体育をどうしているか（計画的に雨の体育を行っているか）	技術的
134	⑩⑩のような技能テストを行っているのか（剣道・水泳・ダンス・ハンドボールなど）	技術的